

## キリスト・イエスの問いかけ

新 茂之

奨励者紹介[あたりし・しげゆき]

同志社大学文学部長

同志社大学文学部教授

[研究テーマ] 経験主義の哲学的意義

しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章29—37節)

### キリスト教の掟

「ルカによる福音書」のなかでも10章25節から始まる部分は、たいへん有名な箇所であります。ここを説教とか奨励とかで取りあげるひとも多いのではないのでしょうか。そこでは、キリスト・イエスと律法学者との問答で話が進んでいきます。邦訳の聖書にはいくつかありますけれども、たとえば、新共同訳の聖書は、「善いサマリア人」という見だしをそれに付けています。そのなかで、キリスト・イエスは、なにをわたくしたちに教えようとしているのでしょうか。キリスト・イエスの問いかけに照準を定めて、それを考えていきたいと思えます。

まず、律法学者は、キリスト・イエスに向かって、こう尋ねています。「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」(25節)。しかしながら、キリスト・イエスは、この問いにたいしてはみずからはお答えにならずに、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」(26節)と、逆に律法学者に質問されています。質問にたいして質問で応対するというのは、一般に、失礼な態度であります。通常の場合であれば、わたくしたちは、受けた質問にたいしては、誠実にそれに回答すべきでしょう。それにもかかわらず、キリスト・イエスは、そのようには対応されませんでした。キリスト・イエスは、律法学者の質問をきちんと引きうけないで、それどころか、律法学者に同じ趣旨の質問を投げかけられています。キリスト・イエスは、なぜ、こ

のような姿勢で律法学者に臨まれているのでしょうか。「ルカによる福音書」の記述するところに従えば、律法学者は、キリスト・イエスがどれほど律法を知っているのか、律法にかんするキリスト・イエスの見識を試そうとしています(25節)。あるいは、律法学者は、みずからの理解がキリスト・イエスのそれよりも優れているのを示そうとしているのかもしれませんが。その意味では、律法学者は、キリスト・イエスにたいして、意地の悪い質問をしています。

しかも、律法学者は、自分ではすでに分かっていることを、「先生」とみずから呼んでいるキリスト・イエスに聞いています(25節)。なるほど、永遠の生命を獲得するための術が律法学者にほんとうに分かっていないのであれば、律法学者の行いはとくに問題にはなりません。しかしながら、律法学者は、専門家と名のっているのですから、律法をしっかりと勉強しているはずで、専門家である以上、そのひとは、普通のひとたちよりも律法をよく知っていなければなりません。だから、この場合、律法学者が律法をちゃんと理解していないというのは、考えにくいでしょう。この点を踏まえれば、律法学者のほうがキリスト・イエスにたいしてきわめて失礼な態度を取っています。だから、そのような質問には真摯に向きあう必要はありません。場合によっては、わたくしたちは、それを無視してもよいかもしれません。

このように、キリスト・イエスにたいする、律法学者の接しかたは、不遜である、と断罪できます。キリスト・イエスは、それを見きわめて、律法学者の問いかけには応じられなかったのでしょう。しかしながら、そうではありますけれども、キリスト・イエスは、傲慢な律法学者をなおざりにはなさらずに、落ちついて律法学者を諭すように、「律法には何と書いてあるか」と尋ねられました。これは、きわめてうまい切りかえしてあります。というのも、律法学者は、キリスト・イエスの質問に答えられなければ、みずからの無知を公衆の面前で曝けだしてしまうからであります。律法学者は、キリスト・イエスを試そうとしたけれども、キリスト・イエスの問いかけによって、逆にみずからが試されてしまう、という事態に陥っています。それゆえ、律法学者は、体面を守るためにも、キリスト・イエスの質問にきちんと回答しなければなりません。

律法学者は、つぎのように述べます。「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」(27節)。律法学者の発言の前半は、申命記6章5節のことばになっています。すなわち、申命記は、わたくしたちに「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」と教えています。律法学者の発言の後半は、「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」という、レビ記19章18節に基づいています。これらは、キリスト者にとって最高に重要な掟であります。キリスト・イエスが救い主であると告白したキリスト者にとって、全身全霊で神を愛し自分のように隣人を愛することこそ、信仰の証になっています。このように、律法学者は、みごとに模範的な応答をキリスト・イエスに返しています。それゆえ、キリスト・イエスは、律法学者にこうおっしゃっています。「あなたの答は正しい」(28節)。

### キリスト・イエスの誘(いざな)い

キリスト・イエスの、こうした問いかけは、いったい、わたくしたちになにを伝えているのでしょうか。すでに確認したように、キリスト・イエスに教えを請おうとした律法学者は、すでに自分自身で答えを知っていました。このようなことは、少なからずわたくしたちにもあるのではないのでしょうか。確かに、わたくしたちには、律法学者のように、たとえ表面的であったとしても、いやしくも先生と呼んでいるキリスト・イエスを試した

り、あるいは、みずからの優位性を誇示しようとしたりする、邪な思いはないはずで。しかしながら、つぎのような状況は、よくあるのではないのでしょうか。わたくしたちは、わたくしたちが直面しているみずからの課題にたいして一定の答えを、実のところ、わたくしたちの心のなかにすでに持っているのではないかと。

確かに、律法学者には、キリスト・イエスをやりこめてやろう、という邪悪な気持ちがありました。それにもかかわらず、キリスト・イエスは、律法学者の策略を見ぬき、律法学者の質問にたいして、律法学者に問いなおすというしかたで、丁寧に応答されていきます。その結果、律法学者は、みずから提起した問いにみずから答えることになりました。わたくしたちは、いま抱えている問題を巡って、なにをなすべきか、自分のすべきことを理解しているのかもしれませんが。キリスト・イエスを先生として慕えない律法学者のように、素直になれない自分がそこにいて、そのように曇った目が真実からわたくしたちを遠ざけているのではないのでしょうか。その都度その都度の欲情とか自己の利益とかに目が眩んでしまって、わたくしたちは、ほんとうにしなければならないことを直視できないようになっていくのかもしれませんが。キリスト・イエスの問いかけは、そのように正直にはなれないわたくしたちに働きかけて、わたくしたちの目をわたくしたちの内面に向けさせ、良心の声に耳を傾けるようにわたくしたちを促しているのであります。

そうであるのに、律法学者は、ふたたび、「自分の立場を弁護しようと思って」（29節）、自分の隣人はだれか、とキリスト・イエスに執拗に質問を浴びせています（29節）。やはり、キリスト・イエスは、この質問にも直接には対応されていません。なぜでしょうか。もしキリスト・イエスが律法学者の隣人についてなにごとかを発言されていれば、律法学者は、それを捕まえて、「あなたの言う隣人のためにわたくしはすでに働いています」とみずからの正しさを主張するでしょう。キリスト・イエスは、律法学者の企みをきちんと見すかして、律法学者の質問を正面から取りあげられなかったのでしょう。

なるほど、このようなしかたで、キリスト・イエスの対応の意味を把握することについて、とくに問題はありませんが。しかし、わたくしは、これ以外にも、なぜキリスト・イエスが律法学者の質問にまともに答えられなかったのか、その理由があるのではないかと考えています。それを明白にするために、「ルカによる福音書」10章30節以降にキリスト・イエスのおっしゃったことを少し辿っていきましょう。すでに述べましたように、この部分は、人口に膾炙していますので、ここでは必要な点だけをかいつまんで、話を進めていきたいと思えます。

あるひとが旅の途中で強盗に襲われ瀕死の状態になりました（30節）。そこに三人の人物が通りかかります。最初に祭司が来ます（31節）。言うまでもなく、祭司は、ユダヤ教では要職に就いているひとであります。キリスト・イエスのたとえでは、そのように立派である祭司ですら、重傷の旅人に目を向けようとはしません（31節）。つぎに来るのは、レビ人です。レビ人は、当時、祭司に仕え、聖所を支える任務に当たっていました。レビ人も一定の地位にあったと言えるでしょう。そのレビ人も、やはり、祭司と同じように、強盗に襲われた旅人の向こうがわを通りすぎてしまいます（32節）。三人目のひとは、「ルカによる福音書」の記者に拠れば、サマリア出身の旅人です。当時、ユダヤ人たちは、宗教的な純血を貶めているという理由から、サマリアの人びとを忌みきらっていました。サマリア人が負傷している旅人のところに現れると、すぐさま旅人に駆け寄り、傷の手あてをし、追いはぎに襲われたひとを宿屋に連れていき抱きました（33節～34節）。それだけではありません。そのサマリア人は、宿泊とか看病とかに掛かった費用までも負担しました（35節）。

キリスト・イエスは、このように話されたあと、律法学者につきのように問いかけられます。「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」（36節）、と。キリスト・イエスは、ユダヤ人たちが蔑んでいたサマリア人の善行をユダヤ人である律法学者に指摘させようとされています。隣人になることは、身分とか職業とか生まれとかに関係なく、隣人としての行ないにのみ関与しているのです。

### 律法学者の問い

つぎのようにこれまでの叙述をまとめられるでしょう。キリスト・イエスは、律法学者の悪だくみを察知されています。そのうえで、キリスト・イエスは、それを上まわる問いかけによって、律法学者がみずからを省み聖書の教えに向かうように、配慮を持って、律法学者を導かれています。それゆえ、キリスト・イエスが、祭司、レビ人、サマリア人を話に登場させ、サマリア人を隣人愛の実践者として位置づけられたときの狙いは、こうでしょう。すなわち、キリスト・イエスのもくろみは、律法の知識を自負している律法学者に、隣人の資格がそれには依存しないことを気づかせるところにある、と。

ここでキリスト・イエスの問いかけと律法学者の問いとを比べてみましょう。律法学者は、このように言っていました。だれがわたくしの隣人であるのか、と。これをつぎのように言いかえられます。

わたくしにとってだれがわたくしの隣人であるのか

これにたいして、キリスト・イエスの問いかけは、こうです。

だれが強盗に襲われたひとの隣人になったのか

これをもう少し別様に表現すると、こうなります。

強盗に襲われたひとにとってだれがそのひとの隣人になったのか

こうした言いまわしが明らかにしているように、律法学者の問いには「わたくし」という一人称のことがばが現れています。

律法学者がキリスト・イエスの問いかけを受けて告白しているように、強盗に襲われたひとの隣人になったのは、ユダヤ人の祭司でもレビ人でもなく、そのひとを助けた三番目の人物、すなわち、サマリア人です。キリスト・イエスは、そのサマリア人に照準を定めるように、律法学者を誘っておられます。だから、キリスト・イエスの問いかけの中心は、サマリア人にあります。それゆえ、その部分を一人称に置きかえれば、キリスト・イエスの問いかけと律法学者の問いとをいっそう明瞭に比較できるようになります。キリスト・イエスの問いかけは、

だれにとってわたくしはそのひとの隣人になったのか

となります。一方、律法学者の問いは、

わたくしにとってだれがわたくしの隣人であるのか

を意味しています。

これら二つの疑問文は、どのように違っているのでしょうか。「わたくしにとって」を強調する律法学者の視点は、つねに自分自身にあります。だから、律法学者は、自分を中心に置いて、そこから周りのひとを眺めて、そのなかから、自分にとっての隣人を選別しようとしています。確かに、わたくしたちは、自分を中心にしてしかものごとを見られませんか考えられませんか。その意味で、わたくしたちは、自己中心的な存在であります。ほかのひとの目を借りて、それを通して世のなかを眺めることは不可能でしょう。わたくしたちに

は、自分の目を使うより方法はありません。このように、わたくしたちは、いつも「自分」という色めがねを掛けてしか、世界を捉えられません。それゆえ、律法学者のように、自己中心的であることは、わたくしたちにとって避けようのない事実であります。それでは、わたくしたちの「自分」は、中立的で客観的で透明でしょうか。けっしてそうではありません。わたくしたちの見かた、あるいは、見えかたは、いつも偏見とか先入観とかを含みこんでいます。

別言すれば、わたくしたちに現れている世界の様子は、少なからず、歪んでいます。その一方で、それは、わたくしたちにとっては、紛れのない現実であります。だから、それを越えたところにも、その深みにも、真実はありません。たとえば、人間の目の生理的な構造のために、わたくしたちは、赤外線と紫外線を捕捉できません。とはいえ、そのように制限的に立ちあらわれてくる視覚的世界こそ、ほかでもない、わたくしたちのほんとうの世界であるのであります。

このように、世界にたいする、わたくしたちの描像は、自己中心的に歪曲しています。それは、わたくしたちにとって真の姿であります。キリスト・イエスは、自分を中心に据えてキリスト・イエスに挑もうとしている律法学者の問いを一貫して避けられました。言いかたを換えれば、サマリアの旅人からすれば他者である人物に焦点を絞った問いかけになっていきます。確かに、わたくしたちは、自分を基点にすることからは逃れられません。他方、キリスト・イエスは、けっして律法学者を排除されませんでした。この点に鑑みれば、つぎのように言えるのではないのでしょうか。キリスト・イエスは、わたくしたちの自己中心的な立ち位置から、まずはほかのひとに視線を向けるように、わたくしたちにおっしゃっている、と。あるいは、自分を中心に置いてしか周囲を認識できないからこそ、自分自身ではなく、まずは身の回りにいるひとびとに目を向けて、そのひとの隣人になるように、みずからの行為を方向づけていきなさい、と。

### 隣人になること

このように述べてくると、自分のことを大切に思いキリスト・イエスを試そうとする律法学者は、もはや、わたくしたちの代表であります。わたくしは、「だれがわたくしの隣人であるのか」とキリスト・イエスに故意に尋ねた律法学者と同じように、まずは自分を気づかっています。律法学者のように、わたくしたちは最初に自分の隣人を捜そうとします。もっと言えば、わたくしたちは、傷を負ったひとの向こうがわを歩いていった祭司とかレビ人とかと同じく、自分の隣人でないひとには目を向けず、それゆえ、そのようなひとを愛そうとはしません。

確かに、わたくしたちの基本的な心情として、たとえば、わたくしは、なによりもわが子を愛します。わが子は、わたくしの隣人であります。その子がなにを望みなにを嫌っているのか、その性格を知っているので、わたくしは、わが子をケアできます。これにたいして、他人の子どもは、わたくしの隣人ではないので、そのひとの特性が分からず、わたくしは、その子どもに十分なケアを与えられないでしょう。このように、わたくしたちにとって、「隣人ではないので愛せない」という言い分は、普段の生活からすれば、説得的ではありません。

しかしながら、そのような態度は、どのような事態を生むでしょうか。キリスト・イエスは、それをすでに分かりやすく説明されています。なぜ、祭司とレビ人は、瀕死の傷を負った旅人の横を通りすぎたのでしょうか。現代風に言えば、祭司とレビ人は、厄介なめごとを巻きこまれるのを避けようとしたのかもかもしれません。

ん。とはいうものの、その旅人が自分の肉親であれば、そのふたりは、どのような振るまいをしたでしょう。祭司とレビ人は、三番目に来たサマリア人と同じように、旅人に近づいてその傷を手あてたでしょう。祭司とレビ人は、律法学者と同じように、「だれがわたくしの隣人ですか」と尋ねて、自分にとっての、すでに見つけた隣人だけをケアする、という考えの持ち主であります。このように「隣人ではないので愛せない」という姿勢は、ごくごく限られた範囲でしかほかのひとを助けられなくしてひとを狭隘にしていきます。

律法学者は、キリスト・イエスに促されて、自分と同じような種類の人間ではなく、それとは異なるサマリア人に注目するようになっていきます。キリスト・イエスの問いかけは、自己中心的にしか考えられない律法学者の隣人愛を律法学者本人に退けさせています。ここに至って、わたくしたちは、つぎの点に気づきます。すなわち、キリスト・イエスは、律法学者の不遜な態度にもかかわらず、律法学者の無礼をあげつらわずに、愛を持って、それを指摘されています。

キリスト・イエスの問いかけには、もう一つ注意すべき事項があります。これまで述べてきたように、キリスト・イエスの隣人愛は、だれにとってわたくしはそのひとの隣人になったのか、という視点に収斂しています。すなわち、ここでは、隣人であることが重要であるのではなく、肝要であるのは、隣人になることであります。わたくしたちは、キリスト・イエスの問いかけに従って、「隣人ではないので愛せない」という発想を脇に置こうとしています。あるいは、わたくしたちは、サマリア人のように、強盗に襲われた旅人の隣人になろうとしています。それでは、わたくしたちは、なぜ、そのひとの隣人になろうとしているのでしょうか。言うまでもありません。わたくしたちは、そのひとの隣人ではなかったからであります。「なる」という事態は、そのまゝに、「そうではない」という状況を持っています。ひとを愛せないから、ひとを愛せるようになるとうします。謙虚でないから、謙虚になろうとうします。自分を中心にしてしかものごとを見たり聞いたり話したりできないから、ほかの人に視線を注いでいこうとうします。それゆえ、キリスト・イエスは、それまでは旅人の隣人ではなかったけれどもそのひとの隣人になったのは、だれか、と問いかけられています。キリスト・イエスの問いかけは、「わたくしの隣人ではないのでそのひとを愛せない」という考えかたを見なおすようにわたくしたちに働きかけています。「なること」の重視は、「そのひとはいまは隣人ではないけれども、いつかはそのひとを愛したい」という告白を招いているのであります。

そのためにはなにが必要でしょうか。キリスト・イエスは、すでにこれに答えを与えられています。キリスト・イエスは、律法学者に「そのとおり行いなさい」(28節)とおっしゃっています。話の最後になっても、やはり、キリスト・イエスは、「あなたも行って同じようにしなさい」(37節)と律法学者に語られています。すなわち、隣人になるためには、まずは一步を踏みだして声を掛けたり手を差し伸べたりする必要があります。実際的にほかのひとに寄りそおうとする態度こそ、隣人になることに必須の要件であります。キリスト・イエスのおっしゃる隣人愛は、自分の隣人を捜そうとする愛ではありません。それは、自己中心的でなかなかひとを素直に愛せないからこそ、隣人ではないひとに勇気を持って実際に近づいてそのひとの隣人になろうとする思いから生まれる愛であるのであります。

ひとこと、お祈り申しあげます。すべてを統べたもう神さま、このように志を同じくするひとびととともにあなたのみことばに耳を傾けることができましたこと、ほんとうにありがたく感謝申しあげます。隣人ではないひとをなかなか愛せないわたくしたちがいます。そのようなわたくしたちにどうか勇気を与えてくださり、

そうしたひとたちをも愛することができますように、あなたの大きな愛でわたくしたちを導いてください。あなたが救い主であると告白した校祖新島襄が創設しました、この学び舎に集うひとりひとりに、あなたの豊かな恵みをお与えください。もしも、心と体に重荷を負っている者がおりましたら、その者の隣人になるために、どうかわたくしたちをお遣わしてください。あらゆることに感謝して、この祈りを尊い主の御名を通して御まえに捧げます。アーメン。

※本文中の聖書箇所は、口語訳聖書を用いています。

2019年5月22日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録